

七助「どんな様、ここまでご無事に旅をすることができて、私もうれしゅうございます。これから死ぬまでどんな様のおそばでご奉公させていただき、暮らしたいと思えます。」

七助さんは、与右衛門さんを見ながら言いました。与右衛門さんは七助さんに頭を下げてやさしく語りかけました。

③ 与右衛門「七助さん、ありがと



う。

まずは家の中へ入りましょう。七助さん、おじいさんの頃から本当に長い間、私たちのた

めに働いてくれて感謝しています。また、今度は近江までお供をしてもらい何とお礼を言えばよいのやら。しかし、私はもうお城勤めの侍ではなくなりました。母を養いながら二人で貧しい暮らしをしていくのです。七助さんは、大洲へ帰って新しい生活を始めてください。」

与右衛門さんの思いがけない言葉に七助さんはびつくりしてしまいま

した。

七助「えっ、どんな様、私は死ぬまでどんな様のおそばでお仕えいたします。一生、ここに置いてください。お願いします。どんな様。」

与右衛門さんはふところから銀三百文のお金が入った袋を出して、その中から二百文を七助さんの手に渡し、

与右衛門「七助さん、私はこれからお母さんどのような暮らしていかるか、まだ分からないのです。七助さんは、大洲へ帰ってこのお金を使って何か商売でも始めて元気に暮らしてほしい。これが私からのお願いです。」

与右衛門さんは、七助さんの手をしっかりと握りしめました。

七助さんは涙を流しながら七助「はい、どんな様、わかりました。長い間お世話になり、ありが



とうござ

いました。

大洲へ帰

つてまた、

やり直し

ます。

どんな

様、十分

お身体に

気を付け

て、お母

さまを大事にお過ごしてください。」

与右衛門「七助さんも体を大切にな。」

与右衛門さんも七助さんの目にも、涙が光っていました。

④ 小川村に帰ってお母さんと暮らし始めた与右衛門さんは考え込みました。

与右衛門「お母さんに孝行ができるようになってうれしいが、これから生活していくためには何かしなければならぬ。どうすればいいだろうか。うーん。そうだ、お金があつて銀百文残っている。これを元手に、酒屋を始めよう。村の人たちは、お酒が高くてなかなか買えないはずだ。できるだけ安くして少しずつ飲むようにすれば、体にも良いだろう。」

さつそく、与右衛門さんは隣村のつくり酒屋へ出かけて酒を仕入れました。そして、家の前に『お酒売ります』の張り紙を出して、勉強の合間に商売を始めました。

与右衛門「村の人たちがよく買いに来てくれる。ありがたいことだ。」

与右衛門さんの酒屋はびつくりするほど人気ができました。ていねいで親切な酒屋さんとして評判になりました。

⑤ 今日、与右衛門さんが勉強している村人が酒を買いに来ました。

平吉「与右衛門さん、お酒を売ってください。」

与右衛門「おう、これは平吉さん、お仕事は終わりましたか。ところで、今日はどのような仕事をされましたか。」

平吉「はい、今日は雨が降ったり止んだり田んぼのあぜの草刈りをしてきました。」

与右衛門「そうでしたか。それはおつかれ様でした。それじゃ、今日のお酒はこれくらいにしては、どうですか。」

与右衛門さんは、平吉さんの酒どつくりに半分ほど入れて渡し、与右衛門「平吉さん、お酒は身体に良いけれど、飲みすぎると良くないし、明日の仕事にもさしつかえ



ますよ。」

与右衛門さんの話を聞いた平吉さんは言いました。

平吉「与右

衛門さん

分かりま

した。ま

た明日も

そう言う

と、お酒

の入った

とつくり

を大事そ

うにかか

えて帰っ

ていきま

した。い

つの間に

か、小川

村では